

令和 4 年 6 月 19 日現在

機関番号：12611

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K03033

研究課題名(和文) ユーモアの機能的形態の分化とその発達の要因および心理社会的適応への影響

研究課題名(英文) Development of humor styles and its impact on psychosocial adjustment.

研究代表者

伊藤 大幸 (Ito, Hiroyuki)

お茶の水女子大学・基幹研究院・准教授

研究者番号：80611433

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、ユーモアの適応的な表出(親和・自己高揚)と不適応的な表出(攻撃・自虐)の両面に着目し、それらがどのようなメカニズムで発達するのか、また、子どもの心理社会的適応にどのような影響を及ぼすのかを、4805名の小中学生と保護者から得た大規模な縦断データによって検証した。4つのユーモアスタイルの発達には、先天性の強い気質や発達障害特性とは独立に、親の養育行動や子ども自身の余暇活動が関与していることが示唆された。また、これらの適応的/不適応的なユーモアスタイルは、友人関係、いじめ加害・被害、抑うつ、自傷行為、非行などの心理社会的適応に相反する効果を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

社会的な遊びを媒介する感情として進化したと考えられるユーモアは、子どもの日常生活において最も頻繁に観察される感情であり、その機能や発達について理解することは重要な課題であるが、体系的な検証は著しく不足している。本研究はユーモアの発達と機能に関する国内で初めての縦断的検証であり、高い学術的意義を持つ。また、いじめ、不登校、自傷行為などの情緒・行動問題を予防する上で、攻撃・自虐という不適応的なユーモアスタイルを、親和・自己高揚という適応的なスタイルに転換していくことの重要性を示すとともに、その方策として家庭での養育や余暇活動に焦点を当てることの有効性を示唆しており、教育的・臨床的にも意義が大きい。

研究成果の概要(英文)：This study focused on both adaptive (affiliative and self-enhancing) and maladaptive (aggressive and self-defeating) manifestations of humor and the mechanisms by which they develop and how they affect children's psychosocial adjustment, with large longitudinal data obtained from 4805 elementary and middle school students and their parents. The results suggest that parental nurturance behaviors and children's own leisure activities contribute to the development of the four humor styles, independent of strong congenital temperament and developmental disability characteristics. In addition, these adaptive/maladaptive humor styles showed opposing effects on psychosocial adjustment, including friendships, bullying and victimization, depression, self-injury, and delinquency.

研究分野：発達精神病理学

キーワード：ユーモア 縦断研究 感情 いじめ 不登校 抑うつ 自傷行為 発達精神病理学

1. 研究開始当初の背景

「おもしろい」「おかしい」と表現される主観的経験と「笑い」による身体表出をともなう感情現象であるユーモアは、人類にのみ備わった感情でありながら、人間においては最も生起頻度が高い感情の一つであり (Martin & Kuiper, 1999) 人間という存在を特徴づける感情と言えるが、その心理学的性質は十分に明らかになっていない。

図1に示すように、ユーモアは、個人や社会にとって適応的な機能を果たすこともあるが、逆に、不適応的な作用をもたらすこともある。適応的な機能として、親和的ユーモアは、対人関係において「潤滑油」として作用し、対人関係の構築・維持に寄与する (Norrick, 1993)。また、自己高揚ユーモアは、気分転換や認知的再評価などのコーピングの手段として機能することで、メンタルヘルスの維持・向上をもたらす (Lefcourt, 2000)。一方、不適応的な機能として、攻撃的ユーモアは、他者へのからかいやいじめなどの攻撃の手段として機能する (Keltner et al., 2001)。また、自らを笑いの対象にした自虐的ユーモアは、自尊心や社会的地位の低下をもたらす (Martin et al., 2003)。

こうしたユーモアの多面的な機能は、成人の研究によって見出されたものであるが、進化心理学的観点からは、ユーモアは、社会的な遊びを媒介する感情として進化したと考えられており (Gervais & Wilson, 2005) 生活における遊びの比重が大きい子どもにおいては、成人以上にユーモアが重要な役割を果たすと考えられる。例えば、からかいとしてのユーモアがいじめに発展し、最悪の場合、被害児の自殺にまで至るケースもある。しかし、これまでユーモアの発達メカニズムや児童・青年期の心理社会的適応への影響を検討した実証的研究は少なく、特に、こうした機能面によるユーモアの形態 (ユーモアスタイル) を区別した検討は見られない。

こうした背景を踏まえ、本研究では、多様なユーモアスタイルは児童期・青年期においても見られるのか、その個人差は、どのような発達の要因によって規定されるのか、また、対人関係やメンタルヘルスなどの心理社会的適応にどのような影響を及ぼすのか、という3つの問いについて検証する。

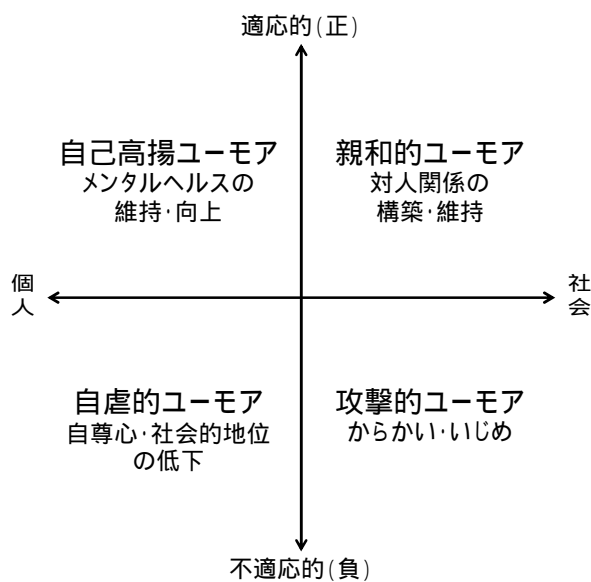


図1 ユーモアの多様な機能的形態

2. 研究の目的

本研究では、これらの問いについて、図2に示す枠組みに沿って検証を行う。第一に、ユーモアの機能的形態として、成人で確認されている4形態を想定し、児童期・青年期におけるユーモアスタイルの測定尺度を開発する。第二に、これらのユーモアスタイルの発達を規定する要因として、知能、気質、発達障害特性などの個人要因と、家庭環境、友人、メディアなどの環境要因の影響を包括的に検証する。第三に、これらのユーモアが、親子関係、友人関係、いじめ被害などの対人関係や、抑うつ・不安、不登校、非行などのメンタルヘルス上の問題に及ぼす影響を多角的に検証する。

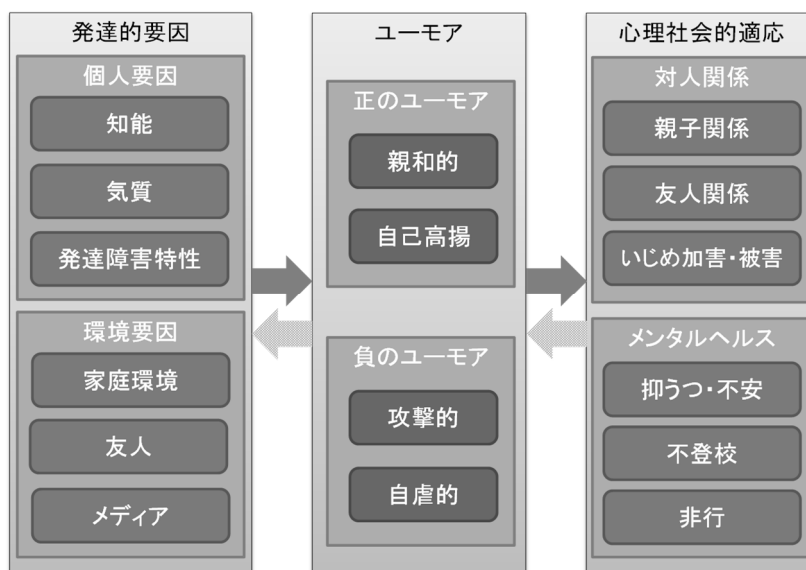


図2 本研究の概念的枠組み

3. 研究の方法

調査対象 本研究は、継続中のコホート研究プロジェクトの一環として実施された。このプロジェクトでは、児童青年の発達と適応のメカニズムを明らかにすることを目的として、中部地域に位置する一つの中規模都市の全ての保育所と小中学校を対象とした全数調査を2007年度から縦断的に実施している。同市は大都市への通勤可能圏内であると同時に、工業、農業が盛んであり、都市で勤務する家庭や、地方型の勤務家庭など、多様な社会経済的状態の家庭が含まれている。人口は約9万人であり、政令市と東京23区を除く全国の市区平均(約10万人)にほぼ等しい。こうした特徴から、同市で得られるサンプルは比較的高い代表性を有していると考えられる。

本研究では、2018年および2019年の9月に、愛知県大府市の全ての小・中学校に在籍する小4～中3の子ども(各学年800名程度)と担任教員、保護者を対象に縦断調査を実施し、4805名について有効回答が得られた。在籍児に占める有効回答率は87.4%であった。

尺度開発 HSQ (Martin et al., 2003; 吉田, 2012), 児童版 HSQ (Fox et al., 2013), HSQ-Y (James & Fox, 2016) を参考に、日本の小中学生向けのユーモアスタイル尺度を独自に作成した。親和的ユーモア, 自己高揚ユーモア, 攻撃的ユーモア, 自虐的ユーモアの4因子を想定し、各6項目(24項目)を作成した。項目の作成に際しては、(1)小中学生にも理解しやすい平易な表現であること、(2)社会的望ましさによる評価バイアスを生じさせる直接的な評価的表現(例:自分はおもしろい人間だ)を避けること、(3)測定領域の領域代表性(測定しようとする領域を質問項目が幅広くカバーしているか)を高めるため、項目間での内容の重複を避け、多様な内容を含むようにすることを指針とした。また、項目の近接性による評価バイアスを避けるため、項目順序は全体でランダム化した。各項目について、「まったくあてはまらない」(1)から「とてもよくあてはまる」(4)までの4件法で評定を求めた。

調査内容 先行研究の系統的なレビューに基づいて、ユーモアとの関連が報告されている構成概念の大部分を含めた。発達の要因として、個人要因(学力、気質、発達障害特性など)と環境要因(家庭環境、余暇活動など)を調査した。また、心理社会的適応として、対人関係(友人関係、親子関係、いじめ加害・被害)、心理的問題(抑うつ、不安、不登校、自傷行為、摂食障害、攻撃性、非行)を調査した。

倫理的配慮 調査に先立って、児童生徒および保護者に対して、調査への参加は任意であり、参加しないことによる不利益は生じないこと、また、調査の回答は統計的に処理され、個別に指導や支援の対象とはならないことを説明文書によって教示し、研究参加の同意を得た。なお、個別の回答に基づく支援は実施していないものの、調査対象市との協定に基づき、研究チームの複数の臨床心理士が同市の適応指導教室に勤務し、学校生活などに関する相談に応じており、その旨を説明文書によって周知している。本研究の手続きは、浜松医科大学の倫理審査委員会の審査と承認を受けた。

4. 研究成果

(1) 因子構造

本研究で独自に作成したユーモアスタイル尺度の因子構造を検証するため、最尤法(プロマックス回転)による因子分析を行った。固有値は第1因子より順に5.753, 3.346, 2.016, 1.667, 1.081, 0.876, 0.856...であり、第5因子以降に明確に減衰の幅が縮小していることから、4因子解が支持された。Table 2の通り、各因子に6項目ずつが.35以上の負荷を示すとともに、他の因子への.35以上の交差負荷は見られず、当初の想定に完全に一致した因子構造が確認された。因子間相関は-.125～.483であり、各因子の独立性の高さが示された。

この結果に基づき、各6項目の下位尺度を構成し、係数を算出したところ、.631～.851の値を示した。攻撃的ユーモアで.631というやや低い値が示されたが、これは下位尺度の半数が逆転項目であることの影響と考えられ、黙従傾向による評価バイアスの軽減効果を考慮すれば許容しうる値と言える。

(2) 発達の要因との関連

2時点のデータを用いて、自己回帰モデルにより発達の要因とユーモアの縦断的関連を検証した。つまり、2018年に測定された発達の要因が、同時点のユーモアを統制した上で、2019年のユーモアを予測するか否かを検証した。自己高揚ユーモア(自己回帰係数.532)に対しては、外遊び(=.052)が正の効果、不安気質(=-.032)、ゲーム単独(=-.034)が負の効果を示した。親和的ユーモア(自己回帰係数.594)に対しては、肯定的気質(=.036)、運動能力(=.042)、肯定的養育(=.033)、外遊び(=.038)、インターネット利用(=.052)が正の効果、ASD特性(=-.038)が負の効果を示した。自虐的ユーモア(自己回帰係数.569)に対しては、ゲーム単独(=.044)、インターネット利用(=.044)が正の効果、テレビ(=-.029)、外遊び(=-.029)が負の効果を示した。攻撃的ユーモア(自己回帰係数.461)に対しては、怒り気質(=.050)、ADHD特性(=.056)、ASD特性(=.043)、学業成績(=.061)、運動能力(=.034)、ゲーム単独(=.059)が正の効果、不安気質(=-.049)、肯定的養育(=-.039)、学習(=-.054)、読書(=-.058)が負の効果を示した。

これらの結果から、気質、発達障害特性、学力・運動能力、余暇活動がユーモアの発達の要因として機能することが示唆された。気質に関しては、肯定的気質が親和的ユーモアを促進する一

方、不安気質が自己高揚ユーモアを抑制し、怒り気質が攻撃的ユーモアを促進することが示唆された。当初の予測に一致し、ユーモアスタイルには子どもの気質的特性が多面的に反映されることが示された。

発達障害特性については、ASD 特性と ADHD 特性の両方が攻撃的ユーモアを促進し、ASD 特性は親和的ユーモアを抑制することも示唆された。他者の心情が汲み取りにくいという ASD 特性や衝動のコントロールが難しいという ADHD 特性が、適応的な形でのユーモア表出を困難にしていると考えられる。

運動能力は親和的ユーモアを促進する一方で、学力とともに攻撃的ユーモアをも促進することが示唆された。学校の中で相対的に優位な立場に立つことが、他者を貶めるようなユーモアの表出につながるリスクを孕んでいることが推察される。

余暇活動に関しては、活動の種類によって大きく結果が異なった。外遊びは、自己高揚ユーモア、親和的ユーモアを促進し、自虐的ユーモアを抑制するという幅広い適応促進的な効果が示された。学習や読書は攻撃的ユーモアを抑制する効果が示唆された。テレビの効果は全般的に弱く、自虐的ユーモアに弱い負の効果がみられるにとどまった。ネット利用の効果は多義的であり、親和的ユーモアを促進する一方、自虐的ユーモアも促進することが示唆された。ゲームについては、共同でのプレイはいずれのユーモアにも有意な効果を示さなかったが、単独でのプレイは、自己高揚ユーモアを抑制し、自虐的ユーモアや攻撃的ユーモアを促進するという適応阻害的な効果が見られた。全般的な傾向として、他者との直接的な相互作用をとまなう活動であるほど（外遊び > 学習、読書、テレビ、ゲーム共同、インターネット > ゲーム単独）適応的なユーモア表出を促進する方向に働くことが示唆された。また、攻撃的要素を含む可能性のあるメディア（ゲーム、インターネット）への接触は、攻撃的なユーモア表出（攻撃的ユーモア、自虐的ユーモア）を促進するリスクがあることがうかがわれる。

（3）心理社会的適応との関連

2 時点のデータを用いて、自己回帰モデルによりユーモアと心理社会的適応の縦断的関連を検証した。つまり、2018 年に測定されたユーモアスタイルが、同時点の心理社会的適応を統制した上で、2019 年の心理社会的適応を予測するか否かを検証した。

対人関係適応への効果 友人関係問題（自己回帰係数.499）には、自虐的ユーモア（ $=.080$ ）、攻撃的ユーモア（ $=.027$ ）が正の効果、自己高揚ユーモア（ $=-.069$ ）、親和的ユーモア（ $=-.117$ ）が負の効果を示した。親子関係問題（自己回帰係数.524）に対しては、自虐的ユーモア（ $=.085$ ）が正の効果、自己高揚ユーモア（ $=-.054$ ）、親和的ユーモア（ $=-.038$ ）が負の効果を示した。いじめ加害（自己回帰係数.488）に対しては、自虐的ユーモア（ $=.073$ ）、攻撃的ユーモア（ $=.084$ ）が正の効果を示した。いじめ被害（自己回帰係数.470）に対しては、自虐的ユーモア（ $=.102$ ）、攻撃的ユーモア（ $=.031$ ）が正の効果、自己高揚ユーモア（ $=-.050$ ）が負の効果を示した。

以上より、自己高揚ユーモアや親和的ユーモアは小中学生の対人関係適応を向上させることが示唆された。この結果は、自己高揚ユーモアが自信のサインとなることで集団内での地位を高めるとする Klein & Kuiper (2006) のモデルを支持するとともに、親和的ユーモアが社会的遊びを媒介する効果を持つという進化的理論 (Gervais & Wilson, 2005) とも整合的である。一方で、自虐的ユーモアは対人関係適応全般に望ましくない効果をもたらすことが示された。この結果は、他者との関係性の維持のために用いられる自虐的ユーモアが、むしろ集団内での階層性を固定化させ、他者からの排除や攻撃を誘発することを示唆している。友人関係だけでなく親子関係においても同様の効果が見られたことは注目に値する。また、攻撃的ユーモアは、いじめ加害に顕著な効果を示すとともに、友人関係問題やいじめ被害にも弱い効果を示した。いじめ加害への顕著な効果は、集団内での優勢順位を高めるために遊びの文脈で他者を攻撃するという攻撃的ユーモアの性質と符合している。一方、友人関係やいじめ被害への効果は、現代社会の子ども集団において、こうした攻撃的行動が社会的規範にそぐわず、社会的適応を阻害するという Klein & Kuiper (2006) のモデルと整合的である。

心理的問題への効果 抑うつ（自己回帰係数.613）には、自虐的ユーモア（ $=.041$ ）が正の効果、自己高揚ユーモア（ $=-.053$ ）、親和的ユーモア（ $=-.047$ ）が負の効果を示した。不安（自己回帰係数.637）には、自虐的ユーモア（ $=.085$ ）が正の効果、自己高揚ユーモア（ $=-.031$ ）、親和的ユーモア（ $=-.029$ ）が負の効果を示した。不登校（自己回帰係数.483）には、親和的ユーモア（ $=-.035$ ）が負の効果を示した。拒食（自己回帰係数.664）には、自虐的ユーモア（ $=.042$ ）が正の効果、親和的ユーモア（ $=-.029$ ）が負の効果を示した。過食（自己回帰係数.539）には、自虐的ユーモア（ $=.092$ ）が正の効果を示した。自傷行為（自己回帰係数.381）には、自虐的ユーモア（ $=.042$ ）が正の効果、自己高揚ユーモア（ $=-.042$ ）が負の効果を示した。攻撃性（自己回帰係数.675）には、自虐的ユーモア（ $=.036$ ）、攻撃的ユーモア（ $=.041$ ）が正の効果、自己高揚ユーモア（ $=-.035$ ）が負の効果を示した。非行（自己回帰係数.265）には、自虐的ユーモア（ $=.059$ ）、攻撃的ユーモア（ $=.038$ ）が正の効果、親和的ユーモア（ $=-.045$ ）が負の効果を示した。

親和的ユーモアは抑うつ、不安、不登校、拒食、非行に抑制的な効果を示した。これは（少なくとも部分的には）上述のような対人関係適応への効果を媒介したものであると考えられる。4 つのユーモアスタイルのうち、親和的ユーモアのみが不登校を抑制する効果を示したことは、不

登校への予防・介入の方策を検討する上で重要な意味を持つ。自己高揚ユーモアは、抑うつ、不安、自傷行為、攻撃性に抑制的效果を示した。こうした結果は、自らポジティブ感情を喚起することでストレスによるネガティブ感情を緩和するというストレス対処方略としての自己高揚ユーモアの機能を示唆している。自虐的ユーモアは、抑うつ、不安、拒食、過食、自傷行為、攻撃性、非行に促進的な効果を示した。不登校を除く全ての変数に有意な効果を示し、4つのユーモアスタイルの中で、最も心理的問題の予測力が高かった。自己を貶めるようなユーモア表出が、対人関係適応を悪化させるだけでなく、本人の自尊心をも低下させ、多様な心理的問題のリスクを高めるものと考えられる。攻撃的ユーモアは、外在化問題である攻撃性、非行に促進的な効果を示した。からかいなどの攻撃的なユーモア表出が、暴力行為や非行などの、より深刻な外在化問題への発展につながるリスクを有することが示唆された。

(4) 結論

本研究は、ユーモアの適応的な表出（親和・自己高揚）と不適応的な表出（攻撃・自虐）の両面に着目し、それらがどのようなメカニズムで発達するのか、また、子どもの心理社会的適応にどのような影響を及ぼすのかを、4805名の小中学生と保護者から得た大規模な縦断データによって検証した。4つのユーモアスタイルの発達には、先天性の強い気質や発達障害特性とは独立に、親の養育行動や子ども自身の余暇活動が関与していることが示唆された。また、これらの適応的／不適応的なユーモアスタイルは、友人関係、いじめ加害・被害、抑うつ、自傷行為、非行などの心理社会的適応に対して相反する効果を示した。

社会的な遊びを媒介する感情として進化したと考えられるユーモアは、子どもの日常生活において最も頻繁に観察される感情であり、その機能や発達について理解することは重要な課題であるが、体系的な検証は著しく不足している。本研究はユーモアの発達と機能に関する国内で初めての縦断的検証であり、高い学術的意義を持つ。また、いじめ、不登校、自傷行為などの情緒・行動問題を予防する上で、攻撃・自虐という不適応的なユーモアスタイルを、親和・自己高揚という適応的なスタイルに転換していくことの重要性を示すとともに、その方策として家庭での養育や余暇活動に焦点を当てることの有効性を示唆しており、教育的・臨床的にも意義が大きい。

<引用文献>

- Fox, C. L., Dean, S., & Lyford, K. (2013). Development of a humor styles questionnaire for children. *Humor*, *26*, 295-319.
- Fox, C. L., Hunter, S. C., & Jones, S. E. (2016). Longitudinal associations between humor styles and psychosocial adjustment in adolescence. *Europe's journal of psychology*, *12*, 377.
- Gervais, M., & Wilson, D. S. (2005). The evolution and functions of laughter and humor: A synthetic approach. *The Quarterly review of biology*, *80*, 395-430.
- James, L., & Fox, C. (2016). The development of a humor styles questionnaire for younger children. *Humor: International Journal of Humor Research*, *29*, 555-582.
- James, L. A., & Fox, C. L. (2018). Longitudinal associations between younger children's humour styles and psychosocial adjustment. *British Journal of Developmental Psychology*, *36*, 589-605.
- Keltner, D., Capps, L., Kring, A. M., Young, R. C., & Heerey, E. A. (2001). Just teasing: A conceptual analysis and empirical review. *Psychological bulletin*, *127*, 229.
- Lefcourt, R. M. (2000). *Humor: The Psychology of Living Buoyantly*. New York: Plenum Publishers.
- Martin, R. A., Puhlik-Doris, P., Larsen, G., Gray, J., & Weir, K. (2003). Individual differences in uses of humor and their relation to psychological well-being: Development of the Humor Styles Questionnaire. *Journal of research in personality*, *37*, 48-75.
- 吉田 昂. (2012). 日本語版ユーモアスタイル質問紙の作成. *笑い学研究*, *19*, 56-66.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計10件（うち査読付論文 10件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 伊藤大幸・浜田 恵・村山恭朗・高柳伸哉・明翫光宜・辻井正次	4. 巻 印刷中
2. 論文標題 小中学生の自由時間の活動が心理社会的適応に及ぼす影響に関する縦断的検証	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 発達心理学研究	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Murayama Yasuo, Ito Hiroyuki, Hamada Megumi, Takayanagi Nobuya, Myogan Mitsunori, Suzuki Katsuaki, Tsujii Masatsugu	4. 巻 40
2. 論文標題 Examining simultaneous associations of four emotion regulation strategies with abnormal eating behaviors/attitudes in early adolescents	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Eating Behaviors	6. 最初と最後の頁 101449
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.eatbeh.2020.101449	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 浜田 恵・伊藤 大幸・村山 恭朗・香取 みずほ・高柳 伸哉・中島 卓裕・明翫 光宜・辻井 正次	4. 巻 印刷中
2. 論文標題 一般小中学生における性別違和感と心理社会的不適応の関連：性別違和感尺度のカットオフ値の設定	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 発達心理学研究	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Katagiri Masatoshi, Ito Hiroyuki, Murayama Yasuo, Hamada Megumi, Nakajima Syunji, Takayanagi Nobuya, Uemiya Ai, Myogan Mitsunori, Nakai Akio, Tsujii Masatsugu	4. 巻 43
2. 論文標題 Fine and gross motor skills predict later psychosocial maladaptation and academic achievement	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 Brain and Development	6. 最初と最後の頁 605～615
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.braindev.2021.01.003	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Abe Shingo, Oshio Atsushi, Kawamoto Tetsuya, Ito Hiroyuki, Hirashima Taro, Tsubota Yuki, Tani Iori	4. 巻 9
2. 論文標題 Smokers Are Extraverted in Japan: Smoking Habit and The Big Five Personality Traits	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 SAGE Open	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/2158244019859956	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Kuno Fujita Ayaka, Iwabuchi Toshiki, Wakusawa Keisuke, Ito Hiroyuki, Suzuki Katsuaki, Shigetomi Akira, Hirotaka Kosaka, Tsujii Masatsugu, Tsuchiya Kenji J.	4. 巻 13
2. 論文標題 Sensory Processing Patterns and Fusiform Activity During Face Processing in Autism Spectrum Disorder	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Autism Research	6. 最初と最後の頁 741 ~ 750
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1002/aur.2283	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Murayama Yasuo, Ito Hiroyuki, Nakajima Shunji, Hamada Megumi, Katagiri Masatoshi, Tanaka Yoshihiro, Takayanagi Nobuya, Noda Wataru, Tsujii Masatsugu	4. 巻 31
2. 論文標題 Cross-sectional study of associations between parenting behaviors and experiences of bullying and victimization in elementary and junior high school students	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Journal of Health Psychology Research	6. 最初と最後の頁 31 ~ 41
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11560/jhpr.161012072	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中島俊思・伊藤大幸・野田麻里・小池委子・神谷彩・駒谷少郁佳・二宮加歩子・辻井正次	4. 巻 60
2. 論文標題 極小/超低出生体重児の自閉症スペクトラム特性の傾向：1歳6ヵ月健診時におけるM-CHATを用いた標準体重群との比較	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 精神医学	6. 最初と最後の頁 1161-1169
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中島俊思・伊藤大幸・野田麻里・小池委子・神谷彩・駒谷少郁佳・二宮加歩子・辻井正次	4. 巻 -
2. 論文標題 極小/超低出生体重児の自閉症スペクトラム特性の傾向2 3歳児健診におけるPARS短縮版を用いた標準体重児群との比較	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 精神医学	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Suzuki Kanae, Takagai Shu, Tsujii Masatsugu, Ito Hiroyuki, Nishimura Tomoko, Tsuchiya Kenji J.	4. 巻 41
2. 論文標題 Sensory processing in children with autism spectrum disorder and the mental health of primary caregivers	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Brain and Development	6. 最初と最後の頁 341 ~ 351
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.braindev.2018.11.005	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 伊藤 大幸, 白井 利明, 安藤 寿康, 宇佐美 慧, 遠藤 利彦, 氏家 達夫
2. 発表標題 縦断研究は発達の解明にどう貢献するのか
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 伊藤大幸
2. 発表標題 児童・青年の発達とメンタルヘルスに関する大規模縦断研究：性別違和感，社会経済的地位，摂食行動異常，自傷行為の観点から
3. 学会等名 日本教育心理学会第61回総会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伊藤大幸
2. 発表標題 心理学研究における構造方程式モデリング (SEM) の役割とピットフォール (2)
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伊藤大幸・谷伊織
2. 発表標題 Mplusによる多変量解析：心理学研究における実践
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 村上 隆, 行廣 隆次, 伊藤 大幸, 谷 伊織, 平島 太郎	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 226
3. 書名 心理学・社会科学研究のための構造方程式モデリング	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------